

在日朝鮮人学生における〈祖国〉の意味

—朝鮮高校生の〈祖国訪問〉同行調査より

愛知県立大学 山本 かほり

1. 目的

本報告の目的は、朝鮮学校にとっての〈民族〉〈祖国〉とは何かを考察することにある。朝鮮学校が〈祖国〉とするのは日本においては絶対的に「他者化」された朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）であり、その朝鮮との関係ゆえに日本社会において朝鮮学校は、例えば、高校無償化制度からの排除、自治体の補助金停止、さらにはヘイト・スピーチ等、官民一体となった差別や排斥を受けている。しかし、その差別や排斥を不当だと考える人々にとっても、なぜ、あの朝鮮を〈祖国〉と考えるのかを理解することは容易ではない。朝鮮学校関係者はどのような過程を経て朝鮮に愛着や憧憬を持つようになるのだろうか？また、日本で生まれ育ったかれらが、日本とは異なる政治社会体制をもち、また、実際には暮らしたこともない朝鮮をなぜ〈祖国〉だと考えるようになるのか？さらに、その〈祖国〉はかれらの生にとってどのような意味を持つのだろうか？などという問いに答えてみようという試みである。

2. 方法

本研究においては、朝鮮中高級学校（朝鮮中高）における参与観察、朝鮮学校関係者へのインタビューを通じて、かれらの〈祖国〉観がどのように形成されるかを分析した。

さらには、本研究のメインとして、2013年～2017年まで合計5回実施した朝鮮高校3年生の朝鮮への修学旅行（「祖国訪問」）の同行調査の結果もあわせて分析し、本報告の問いに答えてみたいと考えている。同行調査においては、可能な限り、朝鮮高校生のプログラムに同行し、かれらが朝鮮で何を学び、また何を見て、何を感じるのかを観察した。さらには、2014年から2017年は同じホテルに宿泊し、ホテル内での学生たちの様子もあわせて観察することができた。同行中、引率の教員や現地の指導員からも話を聞き、さらには、本年2月には、朝鮮の受入機関および姉妹校を訪問し、現地の立場からみる「祖国訪問」の意味もインタビューし、理解を深める一助とした。

3. 結果

上述の調査からの知見は、かれらが朝鮮を〈祖国〉として内面化するのには「朝鮮では自分を説明する必要がない」という「気楽さ」、即ち、日本社会の在日朝鮮人の処遇のあり方と関連しているということである。つまり、かれらは朝鮮学校という空間では「朝鮮人であること」を否定されないが、一步、日本社会に出ると、何らかの緊張感をもっているという。例えば、制服であるチマチョゴリを着ることの困難、朝鮮語の教科書を電車内で広げることに対する躊躇など、日常生活の細々とした側面において、「朝鮮人であること」を否定されないかという「不安」があるという。しかしながら、朝鮮で生まれて初めて、「周りが全て朝鮮人」であり、道で朝鮮語を話し、朝鮮の歌を大声で歌ってもいいのだという経験をする。そこで、「まると肯定された」感覚を味わい、また、歓待してくれる現地の人たちと出会う中で、朝鮮が〈祖国〉だと考えるようになるのである。

4. まとめ

朝鮮学校があえて、〈民族〉〈祖国〉に向き合うのは、在日朝鮮人が、生活の様々な場で、民族や国家といった問題に直接的に対峙しながら生きざるを得ないからではないだろうか？在日朝鮮人たちは、植民地/戦後責任の未精算、朝鮮半島における南北分断、「北朝鮮」嫌悪、日常的に民族・国家・祖国といった問題に向き合わされる状況にあるからではないだろうか？このような状況の中で在日朝鮮人たちが、民族、国家などというある意味で「伝統的な」問題にむきあっていることの意味を報告したい。